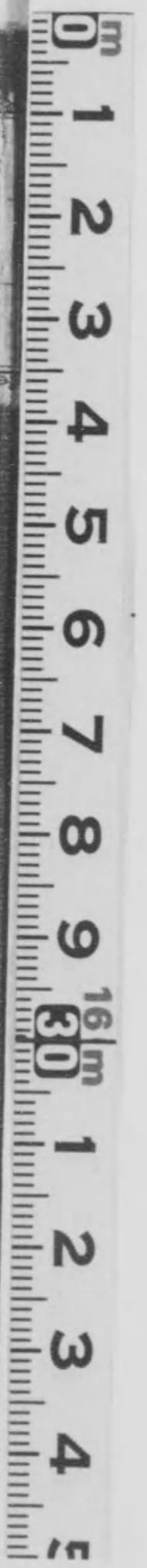


91154
1.76
2



始





3/70



啄木詩集

911.58  
I. 46-2

石川啄木詩選

大正

14. 4. 24

内交

57  
I



~~516-7057~~

啄木の靈に捧ぐ

啄木



## はしがき

明治文壇に異彩ある光輝を放つたのは石川啄木であつた。

彼の生涯は短かつた。が、その短かい二十八年の間に爲した業績は、私達が五十年否、六十年七十年努力しても、尙ほ且つ開拓することの出来ないあるものを見え出したのであつた。

彼の功績は實に偉大と云ふべきである。彼は異端の子として常に虚げられ、あらゆる苦難と闘ひながら夭折した。

彼は一面テロリストとして非常な議論好きではあつたが、また一方には優しい人間性を多分に持つてゐる情熱の詩人であつた。

ある時は不來方のお城の草原に寝ころびては昔の夢を追ひ、またある時は砂濱に、終日泣き暮したりするセンチメンタリストでもあつた。

が、しかし、その涙は單なる甘い感傷的のものではなかつた。彼が落した一掬の涙にも深い意義のあつたことを忘れてはならない。

兎に角彼の藝術は私達に非常に深い印象と、そしてより大きい影響を與へた。



これは心から感謝せなければならぬことだと思ふ。

私は彼の藝術の讚美者であると共にこよなき崇拜者である。——それは私の生長した處が彼の郷土に近い關係から、折々はかつて彼の遊んだ場所に足を向けたりして、強い印象を與へられたからかも知れない——。

彼の遺作は多々あつた。——しかし、若き彼の代表的な思想乃至は傾向を知るに尤も適切なところの、詩ばかりを集めたものはなかつた。私は常にそれを遺憾としてゐた。其で啄木を代表するも最も適切だと思はれる詩篇を纏めてこゝに上梓する次第である。

これは啄木を慕ふ若き人々と共に私の大きなよろこびであります。

やはらかきやなぎ青める

地上の岸邊目に見ゆ

泣けとごとくに。

天才詩人啄木が世を去つてから早くも十餘年は過ぎた。けれども千古不滅の彼の藝術はいよいよ冴えて来るばかりである。

彼が病の爲に倒れたその月にこの書が世に出ると云ふのも思へば不思議な縁ではある。

葛飾の寓居にて

寛

目次

呼子と口笛篇

はてしなき議論の後……………	二
ココアのひと匙……………	四
書齋の午後……………	五
激論……………	六
墓碑銘……………	八
古びたる靴をあけて……………	二
家……………	三
飛行機……………	二六
心の姿研究篇	
夏の街の恐怖……………	一七
起きるな……………	一九

き、つ、き



事ありげな春の夕暮.....三

柳の葉.....三

拳.....三

花ちる日篇

琴をひけ.....三

佛頭光.....三

落日.....三

東京.....三

深みの心.....三

たはぶれ.....三

かりがれ.....三

雨にぬれて.....三

鹿角の國を懐ふの歌.....三

みちのくくの神無月.....三

幕びらき.....三

花ちる日.....三

吹角.....三

公孫樹.....三

小さき墓.....三

あこがれ篇

沈める鐘.....三

杜に立ちて.....三

白羽の鶴船.....三

隠沼.....三

人に聲ぐ.....三

樂聲.....三

海の怒り.....三

荒磯.....三



4

夕の海	七
森の追憶	九
おもひ出	八
いのちの舟	五
孤境	六
鷓鴣橋に立ちて	九
落瓦の賦	九
山彦	九
夜の鐘	一〇
塔影	一〇
黄金幻境	一〇
夢の花	一〇
しらべの海	一〇
五月姫	一一

5

ひとりゆかむ	一五
花守の歌	一八
閑古鳥	三
マカロフ提督追悼の詩	二七
アカシヤの蔭	三五
ひとつ家	四一
壁なる影	四三
鷗	四四
寂寥	四七
秋風高歌	五
江上の曲	七
天火盡	一六
壁畫	一八
炎の宮	一九



のぞみ	.....	一九一
眠れる都	.....	一九五
二つの影	.....	一九九
夢の宴	.....	二〇一
心の聲	.....	二〇三
傘のぬし	.....	二〇六
泉	.....	二〇八
青鷺	.....	二一三
草の莓	.....	二一五

〇〇

# 啄木詩集



## 呼子と口笛篇

### はてしなき議論の後

われらの且つ読み、且つ議論を闘はすこと、  
しかしてわれらの眼の輝けること、

五十年前の露西亞の青年に劣らず。

われらは何を爲すべきかを議論す。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

「VNAHODI」と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるもの何なるかを知る、  
また、民衆の求むるもの何なるかを知る、  
しかして、我等の何を爲すべきかを知る。



實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

「V NAROD !」と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり、

常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。

われらは老人の早く死に、しかして遂に勝つべきを知る。

見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

「V NAROD !」と叫び出づるものなし。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ、

飲料の茶碗には小さき羽蟲の死骸浮び、

若き婦人の熱心に變りはなけれど、

その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。

されど、なほ、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、

「V NAROD !」と叫び出づるものなし。

### ○「V NAROD」のひと匙

われは知る、テロリストの

かなしき心を――

言葉とおこなひとを分ちがたき

ただひとつの心を、

奪はれたる言葉のかはりに

おこなひをもて語らんとする心を、

われとわがからだを敵に擲けつくる心を――

しかして、そは眞面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。



はてしなき議論の後の  
冷めたるココアのひと匙を啜りて、  
そのうすにがき舌觸りに、  
われは知る、テロリストの  
かなしき、かなしき心を。

### 書齋の午後

われはこの國の女を好まず。

讀みさしの舶來の本の

手ざはりあらし紙の上に、

あやまちで零したる葡萄酒の

なかなかに浸みてゆかぬかなしみ、

われはこの國の女を好まず。

### 激論

われはかの夜の激論を忘るること能はず、

新らしき社會に於ける「權力」の處置に就きて、

はしなくも、同志の一人なる若き經濟學者Nと

我との間に惹き起されたる激論を、

かの五時間に亘れる激論を、

「君の言ふ所は徹頭徹尾煽動家の言なり。」

かれは遂にかく言ひ放ちき。

その聲はさながら咆ゆるごとくなりき。

若しその間に卓子のなかりせば、

かれの手は恐らくわが頭を撃ちたるならむ。



われはその淺黒き大いなる顔の  
男らしき怒りに漲れるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。

或る一人の立ちて窓を明けたるとき、

Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か搖れたり。

病みあがりの、しかして快く熱したるわが頬に、

雨をふくめる夜風の爽かなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、

われらの會合に常にただ一人の婦人なる

Kのしなやかなる手の指環を忘るること能はず。

ほつれ毛をかき上ぐるとき、

また、蠟燭の心を截るとき、

そは幾度かわが眼の前に光りたり。

しかして、そは實にNの贈れる約婚のしるしなりき。

されど、かの夜のわれらの議論に於いては、

かの女は初めよりわが味方なりき。

### 墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、

しかして今も猶尊敬す——

かの郊外の墓地の栗の木の下に

かれを葬りて、すでにふた月を経たれど。

けに、われらの會合の席に彼を見ずなりてより、

すでにふた月は過ぎ去りたり。

かれは議論家にてはなかりしかど、



9  
なくてかなはぬ一人なりしが。

或る時、彼の語りけるは、

「同志よ、われの無言をとがむることなかれ。

われは議論すること能はず、

されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を吐責す。」

同志の一人はかくかれを評しき。

然り、われもまた度度しかく感じたりき。

しかして、今や再びその眼より正義の吐責をうくることなし。

かれは労働者——一個の機械職工なりき。

かれは常に熱心に、且つ快活に働き、

暇あれば同志と語り、またよく讀書したり。

かれは煙草も酒も用ひざりき。

かれの眞摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、

かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。

かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横はりつつ、

なほよく死にいたるまで讒語を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり、」

これかれのわれに遺したる最後の言葉なり。

その日の朝、われはかれの病を見舞ひ、

その日の夕、かれは遂に永き眠りに入れり。

ああ、かの廣き額と、鐵槌のごとき腕と、



しかして、またかの生を恐れざりしごとく  
死を恐れざりし、常に直視する眼と、  
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として

かの栗の木の下に葬られたり。

われら同志の選びたる墓碑銘は左の如し、

「われには何時にても起つことを得る準備あり。」

### 古びたる鞆をあけて

わが友は、古びたる鞆をあけて、

ほの暗き蠟燭の火影の散らばる床に、

いろいろの本を取り出だしたり。

そは皆この國にて禁じられたるものなりき。

やがて、わが友は一葉の寫眞を探しめて、

「これなり」とわが手に置くや、

静かにまた窓に凭りて口笛を吹き出だしたり。

そは美しくともあらぬ若き女の寫眞なりき。

### 家

今朝も、ふと、目のさめしとき、

わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、

顔洗ふ間もそのことをそこはかたなく思ひしが、

つとめ先より一日の仕事を了へて歸り來て、

夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、

むらさきの煙の味のなつかしさ、



はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び来る——  
はかなくもまたかなしくも。

場所は、鐵道に遠からぬ、

心おきな故郷の村のはづれに選びてむ。

西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、

高からずとも、さてはまた何の飾りのなしとても、

廣き階段とバルコンと明るき書齋……

けにさなり、すわり心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、

思ひし毎に少しづつ變へし間取りのさまなどを

心のうちに描きつつ、

ランプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば、

その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して、  
泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、  
それを幸ひと口もとはかなき笑みものほり来る。

さて、その庭は廣くして草の繁るにまかせてむ。

夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に

音立てて降るころよさ。

またその隅にひともの大樹を植ゑて、

白塗の木の腰掛を根に置かむ——

雨降らぬ日は其處に出て、

かの煙濃く、かをりよき埃及煙草ふかしつつ、

四五日おきに送り来る丸善よりの新刊の

本の頁を切りかけて、

食事の知らせあるまでをうつらうつらと過さすべく、

隅 13



また、ことごとにつぶらなる眼を見ひらきて聞きほるる  
村の子供を集めては、いろいろの話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、

いつとしもなく、若き日にわかれ來りて、

月月のくらしのことに疲れゆく、

都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、

はかなくも、またかなしくも、

なつかしくして、何時までも棄つるに惜しきこの思ひ、

そのかすかすの満たされぬ望みと共に、

はじめより空しきことと知りながら、

なほ、若き日に人知れず戀せしときの眼附して、

妻にも告げず、眞白なるランプの笠を見つめつつ、

ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

### 飛行機

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

給仕つとめの少年が

たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたつた二人の家に入て、

ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。



17 心の姿研究 篇

夏の街の恐怖

焼けつくやうな夏の日の下に  
おびえてぎらつく軌條の心。  
母親の居睡りの膝から迂り下りて、  
肥つた三歳ばかりの男の兒が  
ちよこ／＼電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎えた野菜。

病院の窓の窓掛は垂れて動かす。

閉された幼稚園の鐵の門の下には  
耳の長い白犬が寢をべり、

すべて、限りもない明るさの中に

どこともなく、芥子の花が死落ち、

生木の棺に裂罅の入る夏の空氣のなやましさ。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、

骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば、

横町の下宿から出て進み来る、

夏の恐怖に物も言はぬ脚氣患者の葬りの列。

それを見て辻の巡査は出かかつた欠伸噛みしめ、

白犬は思ふさまのびをして、

塵溜の蔭に行く。

焼けつくやうな夏の日の下に、

おびえてぎらつく軌條の心。

母親の居睡りの膝から迂り下りて、



肥つた三歳ばかりの男の兒が  
ちよこくと電車線路へ歩いて行く。

### 起 き る な

西日をうけて熱くなつた  
埃だらけの窓の硝子よりも  
まだ味氣ない生命がある。

正體もなく考へに疲れきつて、  
汗を流し、いびきをかいて晝寢してゐる  
まだ若い男の口からは黄色い齒が見え、  
硝子越しの夏の日が毛脛を照し、  
その上に蚤が這ひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。  
そなたの一生に涼しい静かな夕ぐれの來るまで  
何處かでなまよ艶いた女の笑ひ聲。

### 事ありげな春の夕暮

遠い國には戦があり……  
海には難破船の上の酒宴……

質屋の店には蒼ざめた女が立ち、  
燈光にそむいてはなをかむ。  
其處を出て來れば、路次の口に  
情夫の背を打つ背低い女——  
うす暗がりに財布を出す。



何か事ありけな——  
 春の夕暮の町を歴する  
 重く淀んだ空気の不安。  
 仕事の手につかぬ一日が暮れて、  
 何に疲れたとも知れぬ疲れがある。

達い國には澤山の人が死に……  
 また政廳に押寄せる女壯士のさけび聲……  
 海には信夫翁の疫病……

あ、大工の家では洋燈が落ち、  
 大工の妻が跳び上る。

### 柳の葉

電車の窓から入つて来て、  
 膝にとまつた柳の葉——  
 此處にも凋落がある。  
 然り。この女も  
 定まつた路を歩いて來たのだ——

旅鞆を膝に載せて、  
 やつれた、悲しけな、しかし艶かしい、  
 居睡を初める隣席の女、  
 お前はこれから何處へ行く？

### 拳

おのれより富める女に慙まれて、  
 或はおのれより強い友に嘲られて、



くわつと怒つて拳を振上げた時、  
 怒らない心が、  
 罪人のやうにおとなしく、  
 その怒つた心の片隅に  
 目をパチ／＼して蹲つてゐるのを見つけた――  
 たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。  
 やり場にこまる拳をもて、  
 お前は  
 誰を打つか。  
 友をか、おのれをか、  
 それとも又罪のない傍らの柱をか。

花  
 ちる  
 日  
 篇

琴  
 を  
 ひ  
 け

沈の香のそよぎに  
 わが魂はあくがれぬ。  
 二人居の初夏や、  
 はしけやし黒髪よ、  
 琴をひけ、沈の香に。

たをやかにうつむくか、  
 沈の香はゆらぐなり。  
 手ふれては鳴るものか、  
 わが胸も君ふれて



鳴りにしを、琴をひけ。

水無月の青日射、

庭の樹ぞみづみづし。

青梅は庭石に、

君が手は夏の譜に、

花あやめかぎろひぬ。

歌ひくき爪弾や、

沈の香はそよぎぬ。

はしげやし黒髪も、

そよぎぬ、風ありて

一室は薫じたり。

### 佛頭光

ここは生命の森か、さは、

秀つ樹の枝の葉の色も

神の息をや染めぬらむ。

幾時や経し、幾日経し、

幻心さまよひて

ふとしもここに入りたる。

見れば年古る樹樹は皆、

古き記憶の底にゐて

呼びいで難き名の如く、

なつかしくして稚き日

過ぎし事ある故郷の



古道に似ても目は走る。

鳥はいのちを葉の蔭に  
妙音の譜を奏でたり。

黒ずむまでに光る葉は、

ホメロスが世の曙に

吹きしままなる羽輕き

風に久遠をはためきぬ。

森を横ぎる川ありて、

すぎゆく我の影をのせ、

涯をも知らに流れ行く。

こは朝なりや、夕なりや、

はた二の世にや。——我はただ

わが足にこそ歩みたる。

勇みて輕き足音に、

舵、這へる羽根蟲も

木の根の穴に隠れたり。

ふとしも見れば、『永劫の

わかれ』を刻む石碑に

こここは追分——森の辻。

一つの道は、灰白き

鋪石鑄びて坦かに、——

鐘こそ響け、——あはれ、こは

平和の郷の墓の戸に

導き入れり。——人の性



これに迷へる子もありや。  
 我はためらふこともなく  
 ただましぐらに進みける。  
 ゆき、また、ゆけば漸くに、  
 木の間を少し空見えて、  
 香かの木の實よ、たわわにも  
 枝に満ちぬる黄金色。  
 疲れを知らぬこの旅の  
 幾時や經し、幾日經し。  
 尙しもゆけば、葉がくりにも  
 ものの聲あり。——覗へば、  
 神のやうなる幾人の  
 人の聲して我招ぐ。

いのちの森に迷ひ入り、  
 先立ちて來し人ならむ。  
 『黄金木の實のしたたりの  
 これは不老の泉ぞ。』と  
 指さす葉蔭、ふと見れば、  
 當春の香よ、波に鳴る。

諸手に掬めば、水の面、  
 こはそもいかに、若き日に  
 ふたたび逢へる我が影の  
 腫に星ぞ宿りたれ。  
 また指ざされ、手を翳し、  
 ふりさけ見やる西の空。——  
 空の半ばを金色の



佛頭光ぞ包みたる。  
 眩ゆさ、——あばれ、光明の  
 海の返照——尊とさに、  
 これ莊嚴の隨一と  
 歸依の掌底合せぬる。

落 日

爛爛と火の如き日は海に落ちむとす。  
 大空はおしなべて黄金の光なり。  
 海原も黄金の焔にぞ燬かれたる。  
 巖噛み、砂を呑み、戦の詩を刻む、  
 荒磯の砂丘に立ちつくし、涙垂る。  
 落つる日は我を、また、我は日を見つめたり。

一日の短きも、弛みなきかがやきに  
 永遠に動かざる一日となれりけり。  
 落つる日は、何ぞまた明日の日を思はむや。

劫初より九億日「今」こそは權威なれ。  
 いやはてのひと時も生生とかがやきて  
 落つる日の雄力は「永遠」を則れり。

荒獅子を射むとせば、稲光る目をぞ先づ  
 十束矢に貫けよかし。「今」こそは「永遠」の  
 腫なれ、閃閃と前に落ち、後に去る。

いやはてのひと時も、輝けば、空の涯、  
 海の底、黄金に照り入れり。——こを思へば、



人間は小なりき、時にまた、大なりき。  
 涙のみいと熱く垂ると見て、目あぐれば、  
 日は既に落ち去んぬ。——我も亦人なりき。  
 砂丘に立ちつくし、眠るべき暇なし。

東 京

かくやくの夏の日は、今  
 子午線の上にかかれり。

煙突の鐵の林や、煙皆煤、黒き手に  
 何をかも攫むとすらむ、ただ直に天をぞ射せる。  
 百千網蒼蒼に空車行く音もなく  
 あはれ、今、都大路に、大眞夏光動かぬ  
 寂寞よ、霜夜の如く、百萬の心を壓せり。

千萬の墓今日こそ色もなく打鎖りぬ。  
 紙の片白き千ひらを撒きて行く通魔ありと  
 家家の門や又窓、黒布に皆とざされぬ。  
 百千網都に人の影曠星の如  
 いと稀に。——かくて、骨泣く寂滅の死の都、見よ。

かくやくの夏の日は、今  
 子午線の上にかかれり。

何方ゆ流れ來ぬるや、黒星よ、眞北の空に  
 飛ぶを見ぬ。やがて大路の北の涯、天路に聳る  
 層樓の屋根にとまれり。啞啞として一聲、——これよ  
 凶鳥の不淨の鳥。——骨あさる鳥なり、はたや、  
 死の空にさまよひ叫ぶ怨恨の毒嘴の鳥。



鳥啼きぬ、二度。——いかに、其聲の猶終らぬに、  
 何方ゆ現れ來しや、幾尺の白髪かき垂れ、  
 いな光る劍捧けし童顔の翁あり。ああ、  
 黒長裳静かに曳くや、寂寞の戸に反響して、  
 杳の音全都に響き、唯一人大路を練れり。

有りとある磁石の針は  
 子午線の眞北を射せり。

### 深みの心

西風ささとおとして  
 秋雨すぐる急ぎに、  
 黄草の丘の凹み  
 小沼蒼き夕さびれ、

ささ音にかなしき涙顔や、  
 曇りぬ、深みの眞鏡。

雨の洗ひし廊下、  
 白雲仄のけはひに、  
 やぶれの蘆の渚  
 古水の泥深み、  
 静かに宿しぬ、天ゆく雲、  
 あはれさまたなき思ひを

ふとまた雲の亂れの  
 足並淀む夕方、  
 間を洩れて、花の  
 黄金よ、あ、ひたひたと



水面に落ちくる入相目に  
明りぬ、深みの底まで。

冷に見ゆらむ華やぎ、

それさへ、小野の隠りの

沼水の胸に、彌生

花蒔く日その春の

温みあるらむ、——祝の潜音<sup>ひそか</sup>

風吹き、黄草もかをりぬ。

黄草の丘を繞らす

凹みの古沼、深みの

心に、やがて、空ゆ、

啼きわたる白鳥の

おぼろの影あり、ゆらに降りて、

新月さすなる夜は来ぬ。

### たはぶれ

答へもなきに、寄せては

氷れる岩に碎けて

帯とまくなる廣海、

聲白き波波の

穂がしら枯藻をかざすさまも

寒けき荒磯の小犬よ。

岩間の砂の冷たさ、

散らばふ枯藻ふみつつ、

小犬よ、高く吠えぬ、



おごそかに絶間なく  
大洋廣みの胸をしぼる  
叫びにひとりし答へて。

吠えては、波のさしひき、  
冬の日午後の日ざしに  
しぶきそのまま凍りて、  
きららにも珠散らす  
渚邊、波の穂追ひつ、追はれ、  
足痕消されつ、印しつ。

津輕の瀬戸の大船  
函館がよひ行く帆の  
灰の帆足を遅み、

聲かなし、海の鳥  
羽さへ凍りぬ。——それも見じな、  
波追ふ小犬の寒けさ。

出づる日迎へ走せつつ  
入目を追ひて走せつつ、  
この世さびしき渚、  
我も亦人なれば、  
興じて見にけれ、波と犬の  
たはぶれ、人なき荒磯邊。

かりがね

わが立つ沼の汀に  
落ち、また、消えし影あり。



月照る夜半のしぬびに、  
 星人がしろがねの  
 篋篋をし奏でて空を行くと、  
 影のみ見せしや、かりがね。

### 雨にぬれて

梅の老樹に雨降り、  
 雨に濡れて、  
 庭石冷ぞまさされ、  
 おち葉を載せたり。  
 かくして秋來ぬ、限りなさの  
 かなしみ石にぞ凭りぬる。  
 愁ひて泣くに、涙の  
 雨に濡れて、

君に凭るなる我や、  
 尙こそみ胸の  
 ときめく濶み、石に散れる  
 落葉にまさると知る日や。

### 鹿角の國を懷ふの歌

青垣山を繞らせる  
 天さかる鹿角の國を忍ぶれば、  
 涙し流る。——今も猶、錦木塚の  
 大公孫樹、月よき夜は夜な夜なに  
 夏も黄金の葉とかはり、代代に傳へて  
 新らしき戀の譚の稜の音の、  
 風吹きゆけば、吹きくれば、枝ゆ靜かに、  
 月の光の白糸の細布をこそ



織ると聞け。

十和田の嶽の古澤の

鬼栖める峽の深みに、古ゆ、

こもれる雲の滴りの、足あとつかぬ

岩苔の縁を吸ひて流れ來し

溪川かけ路、小男鹿の妻戀ひ鳴くに、

人怖ぢぬ鹿角の國を忍ぶれば、

涙し流る。——その音、世世に朽ちせぬ

碑や、はた白石の廻廊や、

玉垣、壁畫、銅の獅子、また物語、

のこさねど、日月星を生むが如、

人の國なるきらら星——藝術の燭の

生みの親「愛」こそ先づは若兒らの

相思の眉に照り出でて花とし咲くや、

錦木も色をぞ添へし春の世に、

角笛吹きならず獵夫らが弓の弦緒の

鳴りの音も、枝にならべる彩雉子の

番と見れば鳴らざりし昔おもへば、

涙し流る。

神の使の羽かろき

蜻蛉子が告げの泉の壽に

流れはつきぬ米白の水にうるはふ

高草の鹿角の國を忍ぶれば

涙し流る。——その川に齋心の

肌淨め、朝な夕なに研かれて、

み目も清しき色白の鹿角少女が

夕づとめ、——肩にま白き雲纏ふ

逆鉾杉の神寂びし根にむら繁る



大木の中は神住む古御堂、  
 壁の墨繪の大半も浮きてし見ゆる  
 日暮時、樹がくれ沈む秋の日の  
 黄に曳く摺裳みだれ這ふ石階ふみて  
 靜靜と御供の神米捧けつつ、  
 伏目にのぼる麻衣が藁束ねせし  
 黒髪に神代の水の香こそすれ。  
 かへしの足の小走りに、杉の陰路を  
 すたすたと、露に濡れたる眞素足に  
 行きこそ通へ、——はららかす  
 袖に葉洩れの日を染めて、  
 神の使の蜻蛉子がいのちの水の  
 源を告げに来る日をさながらに、——  
 青駒かへる背が門へ。

その敬虔<sup>つとよし</sup>さ、美しさ、米白川と  
 もろともに流れ絶えせぬ風流の  
 錦木立てし若兒らが色にも出づる  
 心映、神代のままを目のあたり  
 見ると思へば、涙し流る。

### みちのくの神無月

今、みちのくの神無月、花めき散らふ  
 裳のみだれ、かたむきかかる日の錆の  
 幹あからさま透きいれる  
 漆の木原。——夢白の裾長らかに  
 枝づたひ幻にひく秋姫が  
 わかれ心に、朽空<sup>くそ</sup>の弛み緒ならず  
 浮鳴りのそそ音に走る空名残、



それとし聞くは、金蝶の  
籠ばなれせし千萬羽、――

霜の繪映の黄染葉の日にひらめきて、  
秋の舞、散りに散りしく葉すれ言。

今、野がへりの田つくりは、

かなた、下田の杉寺の山の上そそり  
かたむける五輪、入日を支へ立つ

古塔の尖屋根、

九萬日老いて朽ち落ちし破れのさまも

そのままに影を投げたる廣穂田の、

ことし凶年、みのらねば、穂波も淺く、

さながらに草原めきし畦を指し、

『みのらで枯れし稻よりは、圍の戸までも

來てわめく税吏等が首をこそ

刈るべけれとて鎌とけ。』と

しはがれ聲の高らかに、藁帯したる

老腰の二人、ここをば過ぎゆきぬ。

見れば五輪の空高く

ひらめき出でし九つの晝の星かと

目もはるに輪形にうかぶ白鳩の、

天座あまくらやうやくかたむくや、

たちまち落つる天降あまり矢の、入日に映えて

しろがね箭、つづきに落つる幾筋や、

今、杉寺の廣庭に落葉を焚いて、

老比丘が無量壽品を口ずさむ。

穂緒の色の額や射む。

ここ木原路、たえ間なく秋の舞する

黄染葉の、そよ、金摺りの小扇を



ひらくと見しは、籠につづく後の丘の  
 高公孫樹、ちりのみだれの手狂ひや、  
 五片六片十二片、風の煽りに  
 浮立ちて、蒼の空吹く巴舞ひ、  
 はららぎ降りて、めでたさの御神樂や、  
 木原黄殿の夕扉、  
 今、神無月、舞納。  
 適かに、聳る莊嚴の神色迫る  
 五輪塔、その背がくれにかくろひて、  
 消えのまぎはは香沈む頭光のさびの  
 透冠、紐とくひまもあらばこそ、  
 やねにかけたる入相日、  
 花めき散らひ物染めしうすき寒けの  
 裾長の黄紗を高くひきからけ、

50

天梯遠てんていににけのびのみだれのさまに、  
 薄明り、ひそまりかへる漆原、  
 霜も降るべき冷やぎや。  
 ふとしも起る人けはひ、近づきまさる  
 足音にささら鳴りする散葉路、——  
 さは、金蝶の千萬羽、石ならなくに  
 ふみしかれ、羽袖あはせて燻くもらせし  
 終焉の夢のにじられに  
 音にたつなけき鳴くやらむ。——  
 木の間すかせば、影二つ、旅づかれせし  
 足重の、藝人めきし扮装や、  
 提琴抱ける丈高の、聲の濁りも  
 力なく、『あはれ八里のむだあるき、つかれしや。』とぞ  
 都訛りにふりかへる、五つの紋の



古裕、肩も寒けの三十男。

「否。」と答へて、女聲、

笑みもするらむ嬌めきに、木がくれ見ゆる  
村を指し、「君にし添へば、ひもじさも

忘れて、唄もくりかへし、宿さへあらば、

蝦夷が島そこにも行かむ、さは思へ。

ただこの、さの宿りのみ覺束なし。」と、

みめこそ見えぬ、顔白の、二十歳か、

いづれ、門毎に扇をかざす唄少女、

桃色褪せの長袴、襪ばさみせし

縞袴、今悄悄とおちにたれ。

行き過ぎにして、男、また、

琴絃を掻くすさび言。

「安宿の吊洋燈にもかぎはあれ、

とまるすべなき法界屋かな。」

いつしか、見れば、木原路、

散りを急ぎの葉時雨の降る音もたえて

亥中月まつ宵闇や、

遠き羽音は、公孫樹立つ丘のうしろの

麓の沼にかりがね群れて落ちぬらむ。

かなた五輪のいただきに

秋ゆく空の一つ灯のみちしるべとぞ

うるみたる金星青く瞬いて、

今みちのくの神無月、

石の泣く音もききぬべき夜とこそ成りぬ。

### 幕 びら き

雪ふりぬ。——とところどころに群繁る



古き牧野の白楊の木立の中の  
 され果てし散葉のささ音しめやかに  
 白むと見れば、枯枝に花さへ咲きて、

雪ふりぬ。——廣野黄草のあら床に  
 布きはえわたる白妙の玉の砂は、  
 誰がために音おと輦しぐら練りてゆく  
 御幸大路をつくるらむ、いと夷たひらかに。

雪ふりぬ。——遠近に見る山や、はた  
 森、村、なべて隠ろひて、人立騒ぐ  
 大神の劇詩の中的一幕の  
 今舞ひ了へし静けさは太古のさまに。

雪ふりぬ、ひと日を。——かくて日の夕べ、  
 晴れにしあとはおしなべて音もこそなけれ、  
 落つる日の黄金を孕む横雲の  
 一沫、あはれ動きなき涅槃の姿。

ふと見れば、雲の真中に走せちがふ  
 うなる幾人、神の兒の面影なれや、  
 投げかはす雪の球皆日に映えて、  
 ああ戦ひの幕びらき、——その雄たけびに。

### 花 ち る 日

ああ花散る日、古の道こそひらけ、  
 南より北に一すぢ、故郷へ。  
 並木の櫻年老いて、花も一重の



薄雪や、降りこそかかれ、みちもせに、  
 今春の日はまろらかに、音無輦、  
 ここ過ぐれ、——蜃氣樓する北の海の  
 霞の帆ひく貝船へ。

駒の蹄のあと深くみちに彫られし  
 百年の長き沈黙、ものうけに  
 額をたけて息づくや、山鶯も

花かけの休らひ、音をぞ潜めつる。

ああ花散る日、かかる日を、丹塗の槍柄  
 立てなめて、國歸りする途すがら、

奥大名の行列の騎馬の侍、

華やかに跑をゆるめて練りにけむ。

また、喜びに、悲しみに、おのがじしなる  
 足どりの百千の人や過ぎにけむ。

はた忍ばるれ、幾年の昔、我が世の

春若き戦の門出、かかる日に、

胸は希望の波高き生命の鼓、

ものとなき勇み心に歌うたひ、

この道をこそ花踏みて南せし日を。

ああ花散る日、うらぶれて、また歸り來し

我なれや。——綻び多き袖袂、

つくらふとてか降りかかる花の薄雪、

みちもせを埋めにけりな、いたづらに

散り、また散りぬ、かくながら、春はまた來ぬ。

人の世のいのちの花の散りゆかば、

残るはただに蒼白き追憶の影、

冷えわたる胸は涙に朽ちぞゆく。

ああ花散る日、うらぶれの



つかれにぶき眼あぐれば、  
 臙ろに霞む春の空、今暮れかかる  
 北遠く鐘こそ響け、幽かにも  
 ああなつかしき黄鐘の調べよ、あはれ、  
 故郷の昔ながらの入相や。  
 花ちりしきてほの白き  
 道ひとすぢの夕まぐれ。

吹 角

みちのくの谷の若人、牧の子は  
 若葉衣の夜心に、  
 赤葉の芽ぐみ物燻ゆる五月の丘の  
 柏木立をたもとほり、  
 落ちゆく月を背に負ひて、

ひと夜明しぬ。

東白しのぶの空のほのめき——

天の扉の眞白き礎ゆ湧く水の  
いとすがすがし。——

ひたひたと木陰地に寄せて、  
 足もとの朝草小露明らかみぬ。  
 風はも涼し。

みちのくの牧の若人露ふみて  
 もとほり心角吹けば、  
 吹き、また吹けば、

溪川の石津瀬はしる水音も

あはれ、いのちの小鼓の鳴の遠音と  
 ひびき寄す。  
 ああ静心なし。



丘のつづきの草の上に  
 白き光のまろぶかと  
 ふとしも動く物の影。――  
 凹みの埒の中に寝て  
 心うゑたる曉の夢よりさめし  
 小羊の群は、静かにひびき來る  
 角の遠音にあくがれて、  
 埒こそ、草をふみしだき、直に走りぬ。  
 曉の聲する方の丘の邊に。――  
 ああ歡びの朝の舞、  
 新乳の色の衣して、若き羊は  
 角ふく人の身を繞り、  
 すすしき風に啼交し、また小躍りぬ。  
 あはれ、いのちの高丘に

誰ぞ角吹かば、

我も亦この世の埒をとびこえて  
 野ゆき、川ゆき、森をゆき、  
 かの山越えて海越えて、  
 行かましもと、  
 みちのくの谷の若人、いやさら  
 角吹き吹きて、靜心なし。

公孫樹

秋風死ぬる夕べの  
 入日の映のひと時、  
 ものみな息をひそめて、  
 さびしさ深く流るる。



心のうるみ切なき  
ひと時、あはれ、仰ぐは  
黄金の秋の雲をし  
まとへる丘の公孫樹。

光榮の色よ、などさは  
深くも黙し立てるや。  
さながら遠き昔の  
聖の墓とばかりに。

ましろき鴿のひとむれ、  
天の羽羽矢と降り来て、  
黄金の雲に入りぬる。  
あはれ、何にか儻へむ。

樹の下、馬を曳く子は、  
たはれに小さき足もて、  
幹をしふみぬ。ああこれ  
はたまた何に似るらむ。

ましろき鴿のひとむれ。  
羽ばたき飛びぬ。黄金の  
雲の葉、あはれ、法惠の  
雨とし散りぞ亂るる。

今、日ぞ落つれ、夜ぞ來れ、——  
眞夜中時雨また來め。——  
公孫樹よ、明日の裸身、



我はた何と歌はむ。

小 さ き 墓

彼は今歸り來りぬ、ふるさとの  
古木の栗の下かけに。——  
そが下に稚兒こそ眠れ、二十とせを  
父が手向の花も見ず。

ああ、二十とせを春くれば、葉ぞ且つ芽ぐみ  
鳥なきぬ、小さき墓のその上に。  
また、二十とせを秋くれば、葉ぞ散りしきぬ、  
實も落ちぬ、安き眠りのその上に。

彼は今歸り來りぬ、いと長き  
旅より。——彼は海を見き、山を見き、また、  
古の跡と、來ん世の市を見き。  
汝が見も知らぬ妹は人に嫁ぎぬ。

されど、今、彼は語らず、そとくに外國の  
港港の物語、また眉若き  
戀人と手とりかはして椰子の樹の  
下かけ歩む妹のその幸ひを。

しかはあれ、汝も亦問ふな。稚兒よ、ただ、  
その終焉の日の笑に彼を迎へよ。  
「汝が父は汝を羨む。」と唯一語。  
つめたき碣に口づけて彼は呟やく。



## あこがれ篇

## 沈める鐘（序詩）

一

渾沌濤なす夢より、暗き地に、  
 光を天にと劃ちしその曙、  
 五天の大御座おほみかだ高うもかへらすとて、  
 七寶花しちほうか咲く紫雲の「時」の聲  
 瓔珞しんらくさゆらぐ軒より、生と法の  
 進みを宣りたる無間の巨鐘をぞ。  
 永遠なる生命の證と、海に投げて  
 蒼穹はるかに大神知ろし立ちぬ。

時世は流れて、八百千の春はめぐり、  
 榮光いく度さかえつ、ま 滅びつ、  
 さて猶老なく、理想の極まりなき  
 日と夜の大地に不斷の聲をあけて、  
 （何等の靈異ぞ）劫初の海底より  
 「秘密」の響きを沈める鐘ぞ告ぐる。

二

朝に、夕に、はた夜の深き息に、  
 白晝の嵐に、撞く手もなきに鳴りて、  
 絶えざる巨鐘、——自然の胸の聲か、  
 永遠なる「眠」か、無窮の生の「覺醒」か、——  
 幽かに、朗らに、或は雲にどよむ  
 高潮みなぎり、悲戀の咽ひ誘ひ、



小貝の色にも、枯葉のさゝやきにも  
 ゆたかにこもれる無聲の愛の響。  
 悵める心に、渴ける靈の唇に、  
 滴り玉なす光の清水めぐみ、  
 香りの雲吹く聖土の青き花を  
 あこがれ戀ふ子に天なる樂を傳ふ  
 救濟の主よ、沈める鐘の聲よ。  
 ああ汝、尊き『祕密』の旨と鳴るか。

## 三

ひとたび汝が心の扉に添ふや、  
 地の人百たり人爲の埒を超えて、  
 天馬のたかぶり、血を吐く愛の叫び、  
 自由の精氣を耀く靈の影を

あつめし腫に涯なき涯を望み、  
 黄金の光を歴史に染めて逝ける。  
 彫る名はさびたれ、かしこに、ここの丘に、  
 墓碣、——をしへのかたみを我は仰ぐ。

暗這ふ大野に裂けたる裙を曳きて、  
 我また今さく、天與の命を告ぐる  
 切初の深淵ゆただよふ光の聲。——  
 光に溢れて我はた神に似るか。  
 大空地と斷て、さらずば天よ降りて  
 この世に蓮充つ詩人の王座作れ。

## 杜に立ちて

秋去り、秋來る時劫の刻み受けて



五白秋朽ちたる老杉、その真洞に  
 黄金の鼓のたばしる音傳へて、  
 今日また木の間を過ぐるか、こがらし姫。  
 運命せまくも惱みの黒霧落ち  
 陰靈いのちの痛みに唸く如く、  
 梢を揺りては遠のき、また寄せくる  
 無間の潮に漂ふ落葉の聲。

ああ今、來りて抱けよ、戀知る人。  
 流轉の大浪すぎ行く虚の路、  
 そよける木の葉ぞ幽かに落ちてむせぶ。——  
 驕樂かくこそ沈まめ。——見よ、緑の  
 薰風いづこへ吹きしか。胸燃えたる  
 束の間、けにこれたふとき愛の榮光。

### 白羽の鵝船

かの空みなぎる光の淵を、魂の  
 白羽の鵝船しづかに、その青渦  
 夢なる權にて深うも漕ぎ入らばや。——  
 と見れば、どよもす高潮音匂ひて、  
 樂聲さまよふうてなの鶯の帖を  
 透きてぞ浮きくる面影、(百合姫なれ)  
 天華の生髮瑠々あけぼの染、  
 常樂ここにと和らぐ愛の瞳。

運命や、寂寥兒遣れる、されど夜々の  
 ゆめ路のくしびに、今知る、哀愁世の  
 終焉は靈光無限の生の門出。  
 瑠璃水たたへよ。不滅の信の小壺。



さばこの地に照る日光は氷るとても  
高嶽久遠の座にこそ導かるれ。

隠 沼

夕影しづかに番の白鷺下り、  
槇の葉枯れたる樹下の隠沼にて  
あこがれ歌ふよ。——『その昔、よろこび、そは  
朝明、光の搖籃に星と眠り、  
悲しみ、汝こそとこしへ此處に朽ちて、  
我が喰み啣める泥土ひつちと融け沈みぬ。』——  
愛の羽寄り添ひ、青腫うるむ見れば、  
築地の草床、涙を我も垂れつ。

仰けば、夕空さびしき星めざめて、

しぬびの光よ、彩なき夢の如く、  
ほそ糸はのかに水底に鎖ひける。  
哀歡かみの輪廻は猶も堪へめ、  
泥土に似る身ぞ。ああさは我が隠沼、  
かなしみ喰み去る片さへえこそ來めや。

人に聲ぐ

君が瞳ひとたび胸なる視鏡ひまかきの  
ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、  
瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、  
雲渦ながるる天路の光をこそ  
導きたる幻眩き愛の宮居。

あこがれ淨きを花霧匂ふと見て、  
二人ふたりし抱けば、地の事破壊はなのあとも



追ひ來し理想の投影ぞとほほゑまるる。

こし方、運命の水雨を凌ぎかねて、  
 詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、  
 愁ひの谷をしたどりて足悩みつれ、  
 峻しき生命の坂路も、君が愛の  
 炬火心にたよれば、暗き空に  
 雲間を星行く如くぞ安らかなる。

### 樂 聲

日暮れて、樂堂萎れし瓶の花の  
 香りに酔ひては集へる人の前に、  
 こは何、波渦沈める蒼き海の  
 遠音と浮き來て音色ぞ流れわたる——

靈の羽ゆたかに白鳩舞ひくだると  
 仰けば、一絃、忽らふかき淵の  
 底なる嘆きをかすかに誘ひ出でて、  
 虚空を遙かに哀調あこがれ行く。

光と暗とを黄金の鎖にして、  
 いためる心を捲きては、遠く遠く  
 見しらぬ他界の夢幻に繋ぎよする  
 力よ自由なる樂聲、あゝ汝こそ  
 天なる快樂の名残を地につたへ、  
 魂をしきよめて、世に充つ痛恨訴ふ。

### 海 の 怒 り

一日のつかれを眠りに葬らむとて、



日の神天より降り立つ海中の玉座、  
照り映ふ黄金の早くも沈み行けば、  
さてこそ落ち來し黑影、海を山を  
領する沈黙に、こはまた、恐怖吹きて、  
眞暗にさめたる海神いかる如く、  
巖鳴り碎けて、地を噛む叫號の聲、  
矢潮をかまけて、狂瀾陸を呪ふ。

寄するは夜の胸盾とる秘密の敵——  
墮落<sup>おち</sup>てはこの世に、暗なき遠き昔の  
信のおとづれ叫やく波もあらで、  
あの人、眠れる汝等の額に、罪の  
記徴を刻むと、かくこそ潮狂ふに、  
月なき荒磯邊身ひとり怖れ惑ふ。

荒 磯

行きかへり砂這ふ波の  
ほの白きけはひ追ひつゝ、  
日は落ちて、暗湧き寄する  
あら磯の枯藻を踏めば、  
(あめつちの愁ひか、あらぬ、)  
雲の裾ながうなびきて、  
老松の古葉音もなく、  
仰ぎ見る幹からびたり。  
海原を鶺鴒<sup>みまて</sup>かすめて  
その羽音波に碎けぬ。  
うちまろび、大地に呼べば、  
小石なし、涙は凝りぬ。



大水に足を浸して、  
 駒すめる空を望みて、  
 ささがにの小さき瞳と  
 魂更たまに胸にすくむよ。  
 秋路行く雲の疾影の  
 日を掩ひて地を射る如く、  
 ああ運命下りて鋭斧とせのと  
 胸の門割りし身なれば、  
 月負ふに癩かせたるむくろ、  
 姿こそ濱蘆あしに似て、  
 うちそよぐ愁ひを砂の  
 冷たきに印し行くかな。

夕 の 海

汝が胸ふかくもこもれる祕密ありて、  
 常劫じやうけつ夜をなす底なる泥岩影ひがいはかげ  
 黒黧くろくみねむれる鱗の薄青透き、  
 無限の寂寞墓原領すと云ふ。  
 さはこの夕和、何の意、ああ海原——  
 遠波ましら帆入日の光うけて  
 華やかにもまたしづまる平和、けに  
 百合花添へ眠る少女の夢に似るよ。  
 白塗かざれる墓には汚穢充つと  
 神の子叫びし。外装ぞはかないかな。  
 花夢きえては女の胸罪ぞ宿れ、  
 夕和落ちては、見よ、海黒波わく。  
 酔はむや、再び。平和——妖の酒に



咲き浮く泡なる。沈黙の白墓なる。

### 森の追懐

落ち行く夏の日縁の葉かけ洩れて  
 森路に布きたる村濃の染分衣、  
 涼風わたれば夢ともゆらぐ波を  
 胸這ふおもひの影かと眺め入りて、  
 静夜光明を戀ふ子が清歡をぞ、  
 身は今、木下の百合花あまき息に  
 酔ひつつ、古事繪卷に慰みたる  
 一日のやはらぎ深きに思ひ知るよ。

遠音の柴笛ひびきは低かるとも  
 鋤負へまめ人又なき快樂と云ふ。

似たりな、追懐小さき姿ながら、  
 沈める心に白羽の光うかべ、  
 葉隠れひそみてささなく杜鵑の  
 春花羅綾褪せたる袖を巻ける  
 胸毛のぬくみをあこがれ歌ふ如く、  
 よろこび幽かに無間の調べ誘ふ。

野梅の葩はなびら溶きたる清き彩の  
 罪なき望みに雀躍り、木の間縫ひて  
 摘む花多きを各自に誇りあひし  
 昔を思へば、十年の今新たに  
 失敗の跡なく、痛恨の深創なく、  
 黒金諸輪の運命路遠くはなれ、  
 乳よりも甘かる幻透き浮き來て



この森緑の搖籃に甦へりぬ。

胸なる小甕は『いのち』のつよき酒を盛るに堪へず  
 蝕にぞ悲哀の塚邊に缺くるとても、  
 底なる滴に尊とき香り残す  
 不滅の追懷まばゆく輝やまなば、  
 何の日靈魂終焉の朽あらむや。  
 啼け杜鵑よ、この世に春と靈の  
 きえざる心を君我れ歌ひ行かば、  
 歎きにかへりて人をぞ淨めうべし。

おもひ出

翼酢色水面に褪する  
 夕雲と沈みもはてし

よろこびぞ、春の青海、  
 眞白帆に大日射す如、  
 あざやかに、つばらくくに、  
 涙なすおもひにつれて  
 うかびくる胸のぞめきや。

ひとたびは、夏の林に  
 吹鳴らす小角の響きの  
 うすどよむけはひ装ひて、  
 みかりくら狩服人の  
 駒並めて襲ひくる如、  
 戀鳥の鳥笛たのしく  
 よろこびぞ胸にもえにし。  
 燃えにしをいのちの野火と



おのづから煙に酔ひて、  
 花雲の天領がくり  
 あこがるる魂をはなてば、  
 小さき胸ちひさき乍ら  
 照りわたる玉の常宮、  
 瑯玕ろうかんの宮柱立て、  
 瓔珞えいらくの透簾かけて、  
 ゆゆしともかしこく守る  
 夢の門——門や朽ちけむ、  
 いつしかに碎けあれたる  
 宮の跡、霜のすさみや、  
 礎のただに冷たく。——  
 息吹けば君を包みし  
 紫の霽もほろびぬ。

ふたりしてほほゑみ汲みし  
 井をめぐる朝顔垣の  
 繩さへも、秋の小霧の  
 はれやらぬ深き濕りに  
 我に似て早や朽ちはてぬ。

ああされど、サイケが燭  
 かけ揺れて、戀の小胸に  
 蠟涙のこぼれて焼ける  
 いにしへの痛みは云はじ。  
 とことはに心きざめる  
 新創を空想の羽の  
 彩羽もてつくろひかざり、  
 白絹のひひなの君に



小女子のぬかづく如く、  
うち秘めて齋いき行きなむ  
もえし血の名残の胸に。

### いのちの舟

大海中の詩の眞珠  
浮藻の底にさぐらむと、  
風信草の花かをる  
古巢の岸をとめて飛ぶ  
海の燕の羽の如、  
いのちの小舟かろやかに、  
愛の帆章額じらしに彫り、  
鳴る青潮に乗り出でぬ。

### 遠海面に陽炎の

夕彩はゆるる夢の城  
夏花雲と立つを見て、  
そこに、秘めたる天の路  
ひらきもやする門あると、  
貢する珠、歌の珠、  
のせつつ行けば、波の穂と  
よろこび深く胸を撼る。

### 悲哀の世の黒潮に

はてなく浮ぶ椰子の實の  
むなしき殻と人云へど、  
岸こそ知らね、死の疾風  
い捲き起らぬうたの海、



光の窓に凭る神の  
 瑪瑙の蓋の覆らざる  
 うまし小舟を我は漕ぐかな。

孤 境

老櫨の枯樹によりて  
 墓碣の丘邊に立てば、  
 人の聲遠くはなれて、  
 夕暗に我が世は浮ぶ。

想ひの羽いとすこやかに  
 おほ天の光を追へば、  
 新たなる生花被衣  
 おのづから胸をつつみぬ。

苔の下やすけくねむる  
 故人のやはらぎの如、  
 わが世こそ靈の聖なる  
 白鷺の花のあけぼの。

いたみなき香りを吸へば、  
 つぶら胸光と透きぬ。  
 花びらに袖のふるれば、  
 愛の歌かすかに鳴りぬ。

ああ地に夜の荒みて  
 黒霧の世を這ふ時し、  
 わが息は天に通ひて、



幻の影に酔ふかな。

鶴飼橋に立ちて

老尼の長裳の黒き裳に  
くゆる煙の絡む如く、  
川瀬をながるる暗の色に  
淡夢心の面帕して、  
しづかに射しくる月の影の  
愁ひにさゆらぐ夜の調、  
息なし深くも胸に吸へば、  
古代の奇琴音をそへて  
蜻火湧く如、瑠璃の霧の  
遠宮まぼろし鮮に透くよ。  
八千歳天裂く高山をも、

夜の帳とちたる地に眠る  
わが兒のひとりと瞰下しつゝ、  
大鳳生羽の翼あけて  
はてなき想像の空を行くや、  
流れて盡きざる『時』の川に  
相噛みせめぎてわしる水の  
大波浸さず、怨嗟きかず、  
光と暗とを作る宮に  
詩人ぞ聖なる靈の主。

見よ、かの路なき天の路を  
雲車のまろがりいと靜かに  
(使命や何なる)曙の神の  
跡追ひ驅けらし、白葩はなごう



桂の香降らす月の少女、

(わが詩の驕りのまのあたりに  
象徴<sup>また</sup>り成りぬる榮のさまか。)

きよまり凝りては腫<sup>は</sup>の底

生火の胸なし、愛の苑<sup>ま</sup>に

石神立つごと、光添ひつ。

尊ときやはらぎ破らじとか

夜の水遠くも音沈みぬ。

そよぐは無限の生の吐息、

心臓のひびきを欄につたへ、

月とし語れば、ここよ永久の

詩の領朽ちざる鶴飼橋。

よし身は下ゆく波の泡と

かへらぬ暗黒の淵に入るも、

わが魂卦じて詩の門守る

いのちは月なる花に咲かむ。

### 落瓦の風

時の進みの起伏に

(かの音沈む響に似て、)

反れて千年をかへらざる

法の響を、又更に、

灰冷えわたる香盤の

前に珠数繰る比丘尼らが

細き頌歌に呼ぶ如く、

今、草深き秋の庭、

夕べの鐘のただよひの



幽かなる音をともしなひて。  
 古りし信者の名を彫れる  
 苔も彩なき朽瓦くちがけら  
 遠き昔の夢の跡  
 語る姿の悵はげましう  
 落ちて脆くも砕けたり。

立つは伽藍の壁の下、――  
 雨に、嵐に、うたかたの  
 罪の腫を打とちて  
 胸の鏡に宿りたる  
 三世の則の奇しき火を  
 怖れ尊とみ手を合はせ  
 うたうて過ぎし天の子の

袖に摺れたる壁の下。――  
 ゆふべ色なく光なく  
 白く濁れる戸に凭りて  
 落ちし瓦の破片の上  
 旅の愁の影淡う  
 長き袂を曳きつつも、  
 轉手やはらに古琴の  
 古調一弾、いにしへを  
 しのぶる歌を奏でては、  
 この世も魂ももろともに  
 沈むべらなる音の名残  
 わづかに動く菩提樹の  
 千古の老のうらぶれに  
 咽ぶ百葉を見あぐれば、



古世の荒廢いと重く  
新たに胸の痛むかな。

あはれ、白蘭谷ふかく  
馨るに似たる香焚いて、  
紫雲の法衣揺れぬれば、  
起る鉦鼓の莊嚴に  
寂びあるひびき胸に沁み、  
すがた整ふ金龍の  
燭火の影に打ゆらく  
寶樹の柱、さては又  
ゆふべくを白檀の  
薫りに燻り、虹を吐く  
螺鈿の壁の堂の中、

無塵の夜帯緩う  
慈眼涙にうるほへる  
長老の咒じゆにみちびかれ、  
裳裾静かにつらなりて、  
老若の巡禮群あまた、  
香華ささぐる子も交り、  
禮讚歌ふ夕の座の  
百千の聲のどよみては、  
法の榮光の花降らし、  
春の常影の瑞の雲  
馳なくとばかり、人心  
融けて浄土の寂光を  
さながら地に現じけむ  
驕盛まの跡はこころ乍ら、



(信よ、荒磯の砂の如、  
もとの深淵にかくれしか、  
將たや、流轉の「時」の波  
法の山をも越えけむか。)  
残んの壁のただ寒く、  
老樹むなしく黙しては、  
人香絶えたる靈跡に  
再び磬の音もきかず、  
落つる瓦のただ長き  
破壊の歴史に碎けたり。

似たる運命よ、落瓦。

(めぐるに速き春の輪の  
いつしか霜にとけ行くを。)

ああ、ああ我も琴の如、――  
暗と惑ひのほころびに  
ただ一條のあこがれの  
いのちを繋ぐ光なる、――  
その絃もろく断えむ日は  
弓弦はなれて鶺鴒も射す、  
ほそき唸りをひびかせて  
深野に朽つる矢の如く、  
はてなむ里よそも何處。

琴を抱いて、目をあけて、  
無垢の白蓮、曼陀羅華、  
靄と香を吹き靈の座を  
めぐると聞ける西の方、



涙のごひて眺むれば、  
 澄みたる空に秋の雲  
 今か黄金の色流し、  
 空廊百代の夢深き、  
 伽藍一夕風もなく  
 俄かに壊れほろぶ如、  
 或は天授の爪ぶりに  
 一生の望み奏で了へし  
 巨人終焉に入る如く、  
 暗の戦呼をあとに見て、  
 光の幕を引き納め、  
 暮暉天路に沈みたり。

山 彦

花草啣みて五月の杜の木蔭  
 轉ずる小鳥に和せて歌ひ居れば、  
 伴奏仄かに若葉のゆめの如く  
 見えざる谷より山彦ただよひ來る。――  
 春日の小車沈める轍の音が、  
 はた彼の幼時の追憶聲と添ふか。――  
 緑の柔息深くも胸に吸ひて、  
 黙せば、猶且つ無聲にひびき渡る。

ああ汝、天部にどよみて、再た落ち來し  
 のこんのひびきよ。さらすば地の心の  
 瑯玕無垢なる虚洞のかへす聲よ。  
 山彦！ 今我れ清らに心明けて  
 ただよふ光の見えざる影によれば、



我が歌却りて汝が響の名残傳ふ。

夜の鐘

鐘鳴る、鐘鳴る、たとへば灘の潮の  
雷音落ちては新たに高む如く。

(莊嚴なるかな、『秘密』の清き鈴り、)  
雲路にみなぎり、地心の暗にどよみ、  
月影朧ろに、霧衣白銀なし、  
大夢罩めたる世界に漂ひ來て、  
晝なく、夜なく、過ぎても猶過ぎざる  
劫遠法土の暗示を宣りて渡る。

影なき光に無終の路をひらく

『秘密』の叫びよ、滿林夢にそよぐ

葉末の餘響よ、ああ鐘、天の聲よ。  
ともしび照らさぬ空廊夜半の窓に  
天息にまどひて、現世の罪を泣けば、  
たふとき汝が音におのづと頭下る。

塔影

眠りの大戸に秋の日暫し凭りて  
見かへる此方に、淋しき夕の光、  
却風千古の文をぞ草に染めて  
金字の塔影丘邊に長う投げぬ。  
紅欄朽ち果て、飛龍を彫れる壁の  
金泥跡なき荒廢の中に立ちて、  
仰けば、亂雲白蛇の怒り凄く  
見入れば幽影しじまのおごそかなる。



法蓮悲音の教を八十百秋  
 投げ出す影にと夕毎葬り來て、  
 亂壞に驕れる古塔の深き胸を  
 照らすははかなき臨終の秋の日なり。  
 (神祕よ躍れや)、今はた夜は下り、  
 寂滅封じて、萬有影と死なむ。

### 黄金幻境

生命の源封じて天の縁  
 光と燃え立つ匂ひの靈の門かも。——  
 靈の門、けにそよ、ああこの若晴時、  
 強き火、生火に威力の<sup>ゆきみ</sup>佐弋織りて  
 八千網彩影我をば捲きしめたる。

立てるは愛の野、二人の野にしあれば、  
 汝が瞳を仰ぎて、身は唯言葉もなく、  
 遍照光裡の焰の夢に酔ひぬ。

見よ今、世の慈光の雲を帯びて  
 輓り音なく熱野の涯を走る。  
 わしりぬ、環りぬ、ああさて極まりなき  
 黄金幻境！ かくこて生の夢の  
 久遠の瞬き進みて、二人すでに  
 匂ひの天にと昇華の翼振るよ。

### 夢の花

まほろし縫へる  
 白衣透き、ほのはのと



愛にうるほふ、それや白百合、  
 青縁摺りたる  
 弱肩の羅綾（ろあや）は  
 夢の焔の水無月日射、  
 揺れて覺めにき、和風に、  
 眠り眞白き夏の宮。

夢は破れき。

ああされど、(この姿、

この天けはひ、現ながらに、)

こころ深くも。

夢は猶、玉渦の

光匂ひの波わく淵や。

姫は思ひぬ、極熱の

南縁の愛の國。

光の唇に

曙ぞよみがへり、

青風小琴ただよふ森に、

逝きてかへらぬ

夢の夜の調和を

あこがれうるみ露吹く聲に

姫はうたひぬ、驕樂の

逝きてかへらぬ黄金の世。

葉を蒸す白書。

百鳥の生の謠

あふれどよめく縁搖籃の



枝洩れて地に  
照りかへる強き日の  
夏をつかれて、かをる吐息に  
姫は懐みぬ、常安の  
涼影甘き詩の海。

山並遠く

沈む日の終焉の腫、  
今か沈みて、焔の白矢、  
涯なき涯を

わかれ行く魂の如、  
うすれ融け行く地の黄官に  
姫は祈りぬ、大天の  
靈のいのちの夢の郷。

ひと日、日すでに  
沈みゆき、乳香にっかつの  
夜の律調を戀ふ百合姫が  
待夜ののぞみ、  
その望み先づ破れて、  
暗に楯どる嵐の征矢に  
姫はたふれぬ、残る香の  
いと傷ましき夢の花。

水無月ふかき

森かけの一つ百合、  
見えて見えざる世にあこがれし  
ああその夢の



罌粟花のほひ羽、  
あまりに高く清らかなれば、  
姫は萎れぬ、夜嵐の  
妬みに折るる信の枝。

香柏の根に

(幻や、けに)あはれ

夢の名残を葬むり去りて、

去りて嵐の

血寂びたる矢叫びは

いづち行きけむ。——ただ其夜より

姫は匂ひぬ、青玉の

天壇に照る藝の燭。

### しらべの海

(上野女史に捧けたる)

淡<sup>と</sup>粧<sup>き</sup>染め卯月の日に酔ふ香櫂の  
律調のあけぼの漸く春ぞ老いて、  
歌聲うるむや、柔音の海に深く  
古世の思をうかべぬ。——ああほのぼの、  
ゆらめく藝の焰の波の中に、  
花<sup>か</sup>被<sup>か</sup>衣<sup>ぎ</sup>よ、行きても猶透きつつ  
(心は恨みぬ、ああその痛き姿。)  
五百年あらたに沈淪へる愛を呼ばふ。

凝りては瞳の暫しも動きがたく、  
藝<sup>たくみ</sup>の燭火しづかに我を導きて、



透影羽衣光の海にわしる。  
 見よ今、やはら手轉する樂の姫が  
 眼光みなぎる天路の夢の匂ひ、  
 光の搖曳流るる律調の海。

## 五月 姫

夢の谷、

新影あまき

五月そよ風匂ひたる

にはひ紫吹く桐の

夢の谷、

青草眠る

みどり小牀に五月姫、

白晝うるほふ愛の夢。

まほろしの

姫がおもわは

ハイアシンスの滴露の

黄金したたりなまめける

水盤の

そしらぬ光。

夢は波なき波なれや、

香膏の戀の彩。

黒髪の

さゆらぎ似たり、

むらさき房の桐の花。

花はゆらぎて、わかやける

紅の唇



ほほゑみ添へば、  
白羽燕の羽かろらかに  
小蝶とまりぬ、愛の香に。

## 媚風の

けはひやはらに  
額にたれたる小百合花。  
小百合にほへば、我が姫の  
むね開き

ゆめも匂ひぬ、

谷もにほひぬ、天地の  
光も夢のにはひ園。

夢の谷、

ゆめこそ深き

ここぞ匂ひの愛の宮。

宮の玉簾むらさきの

英華に

今ひるがへれ、

シャロンの野花、谷百合に  
ひるがへりたる愛の旗。

姫が目は

外にとちだる、

とちたる園の愛の門。

園をうがちて、丘こえて、  
をどりつつ

生の小獐の



おとづれ來なば、姫が夢  
 柘榴と咲かめ、甘き夢。

まぼろしの

さめてさめざる

(けにさもあれや、)生の谷。

谷はつつみぬ。いにしへゆ

まぼろしの

さめてさめざる

光、平和、愛の夢、

眠りに生くる五月姫。

### ひとりゆかむ

日はくれぬ。

(愁のいのち)

幻想の森に、いざや

ひとりゆかむ。

萬有音をひそめて、

(ああ我がいのち)おもひでの

妙樂の夜あまさ森。

(夜のおもひ

いのちのおもひ)

戀成りぬ。

(夢見のいのち)

忘<sup>わす</sup>我<sup>が</sup>の森に、いざや

ひとりゆかむ。

花罌粟にほひゆるみて、

(ああ我がいのち)つく息の



みどりうす霧のらぐ森。

(夜のにほひ)

戀のにほひ)

戀破れぬ。

(なけきのいのち)

祈りの森に、いざや  
ひとり行かむ。

面影、いのるまに〜

(ああ我がいのち)天の生  
あらたに響る愛の森。

(夜のいのり)

いのちのいのり)

月照りぬ。

(あでなるいのち)

幻想の森に、いざや  
ひとりゆかむ。

ほのぼの、月の光に

(ああ我がいのち)故郷の  
黄金花岸うかぶ森。

(夜のいのち)

ああ我がいのち)

### 花守の歌

夜はあけぬ。

生の迎ひに

心の住家、園の



門を明けむ。

光よ、花に培かへ。

夢より夢の關据ゑて、

孤境の園に花を守る。

花咲くや。

愛の白百合、

愛はほのぼの、夢の

關に明けて、

露吹く香盞

我にそなへぬ、我が死る

幻、光、生の園。

はなやかに

黄金よそほふ

姫の百人、唇に

ほこり見せて、

ゆたかに門をよぎりぬ。――

それには似じな、わが胸の

あでなる夢に生くる花。

日は闌けぬ、

晝の沈黙。――

かかる日なりき、我は

ひとりゆきぬ、

新たに生や香ると。

守る孤境の園を出て

黄金よそほふ市の宮。



いかめしき

門守の姫ら、

我をこばみぬ、「園の

鍵を捨てよ。」

うつろの笑や、宮居の

権力ちからうしろに、おどろきて

我はかへりき、わが園に。

つちかへば、

花はおのづと

天にむかひぬ。これや

生の梯か。

ねむれば園は花はな樓、

霊の隠家よ。我が守る

小さき園生に我ぞ王。

やはらぎの

愛歌わたるや、

花の大波、園に

しらべ揺りて、

天なる夢の故郷

匂ひ海原さながらに、

光と透きぬ孤境園。

日はくれぬ、

夢の守りに

心の住家、いざや



門をささむ、

夜なく日なき園には

夢より夢の關据ゑて、

天路ひらかむ鍵秘めぬ。

夜よ降りて

ものみな包め。

わが守る園の門には

暗は許りず。

我が園、今か世界に

光をつくる源の

孤境の園に我ぞ王なれ。

閑古鳥

曉迫り、行く春夜はくだち、

燭影淡くゆれたるわが窓に、

一聲、今我れききぬ、しののめの

呼笛か、夜の別れか、閑古鳥。

ひと聲聞きぬ。ああ否、我はただ、

(懐める胸の叫びか、重息の

はるかに愁ひの洞にどよみ來て

おのづとかへる響か、ああ知らず。)

ただ知る、深きおもひの淵の底、

見えざる底を破りて、何者か

わが胸つける刃ありと覺ゆるのみ。

をさなき時も青野にこの聲を



ききける日あり。今またここに聞く。  
 詩人の思ひとこしへ生くる如。  
 不滅のいのち持つらし、この聲も。  
 永遠！ それよ不滅のしばたたき、  
 またたき！ はたや、暫しのとこしなへ。  
 この生、この詩（しばしのとこしなへ）  
 或は消えぬ、かの聲消えし如、  
 消えても更に（不滅のしばたたき）  
 たとへばこの世終滅のあるとても、  
 ああ我生きむ、かの聲生くる如。

似たりな、まことこの詩とかの聲と。――  
 これけに彌生鶯春を讃め、  
 世に充つ藝の聖花の盗み人、

光明の敵、いのちの賊の子が  
 おもねり甘き醉歌の類ならず。  
 健闘、つかれ、くるしみ、自矜に  
 光のふる里しのぶ真心の  
 いのちの血汐もえ立つ胸の火に  
 染めなす驕り、不滅の靈の糧。  
 我ある限りわが世の光なる  
 みづから叫ぶ生の詩、生の聲。

さればよ、あはれ世界のとこしへに  
 いつかは一夜、有情の（ありや、否）  
 勇士が胸にひびきて、閑古鳥  
 ひと聲我によせたるおとなひを、  
 思ひに沈む心に送りえば、



わが生、わが詩、不滅のしるしごと、  
静かに我は、友なるの如、  
無限の生の進みに歌ひつづけむ。

### マカロフ提督追悼の詩

嵐よ黙せ、暗打つその翼、  
夜の叫びも荒磯の黒潮も、  
潮にみなぎる鬼哭の啾々も  
暫し唸りを鎮めよ。萬軍の  
敵も味方も汝が才地に伏せて、  
今、大水の響に我が呼ばふ  
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。  
彼を沈めて、千古の浪狂ふ、  
弦月遠きかなたの旅順口。

ものみな聲を潜めて、極冬の  
落日の威に無人の大砂漠  
劫風絶ゆる不動の滅の如、  
鳴りをしづめて、ああ今あめつちに  
こもる無言の叫びを聞けよかし。  
きけよ、——敗者の怨みか、暗濤の  
世をくつがへす憤怒か、ああ、あらず、——  
血汐を呑みてむなしく敗艦と  
共に没れし旅順の黒瀧裡、  
彼が最後の腫にかがやける  
偉靈のちから鋭どき生の歌。

ああ偉いなる敗者よ、君が名は



マカロフなりき。非常の死の波に  
最後のちからふるへる人の名は  
マカロフなりき。胡天の孤英雄。  
君を憶へば、身はこれ敵國の  
東海遠き日本の一詩人、  
敵乍らに、苦しき聲あけて  
高く叫ぶよ、(鬼神も跳づけ、  
敵も味方も汝が矛地に伏せて、  
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。)  
ああ偉いなる敗將、軍神の  
選びに入れる露西亞の孤英雄、  
無情の風はまことに君が身に  
まこと無情の翼をひろけき、と。

東亞の空にはびこる暗雲の  
亂れそめては、黄海波荒く、  
殘艦哀れ旅順の水寒き  
影もさびしき故國の運命に、  
君は起ちにき、み神の名を呼びて、――  
亡びの暗の叫びの見かへりや、  
我と我が威に輝やく落日の  
雲路しばしの勇みを負ふ如く。  
壯なるかなや、故國の運命を  
擔うて勇む胡天の君が意氣。  
君は立てたり、旅順の狂風に  
檣頭高く日を射す提督旗。――  
その旗、かなし、波間に捲きこまれ、



見る／＼君が故國の運命と、  
世界を撫づるちからも海底に  
沈むものとは、ああ神、人知らず。

四月十有三日、日は照らず、  
空はくもりて、亂雲すさまじく  
故天にかへる邊土の朝の海、  
（海も狂へや、鬼神も泣き叫べ、  
敵も味方も汝が鋒地に伏せて、  
マカロフが名に暫しは跪づけ。）  
萬雷波に躍りて、大軸を  
砕くとひびく刹那に、名にしおふ  
黄海の王者、世界の巨艦も  
くづれ傾むく天地の黒淵裡、

血汐を浴びて、腕をば拱ぎて、  
無限の憤怒、怒濤のちかどきの  
渦巻く海に腫を凝らしつつ、  
大提督は静かに沈みけり。

ああ運命の大海、とこしへの  
憤怒の頭撞ぐる死の波よ、  
ひと日、旅順にすさみて、千秋の  
うらみ遣せる祕密の黒潮よ、  
ああ汝、かくてこの世の九億劫、  
生と希望と意力を呑み去りて  
幽暗不知の界に閉ぢこめて、  
如何に、如何なる證を「永遠の  
生の光」に理示すぞや。



汝が迫害にもろくも沈み行く  
この世この生、まことに汝が目  
映るが如く値のなきものか。

ああ休んぬかな。歴史の文字は皆  
すでに千古の涙にうるほひぬ。  
うるほひけりな、今また、マカロフが  
おほいなる名も我身の熱涙に。――  
彼は沈みぬ、無間の海の底。  
偉靈のちからこもれる其胸に  
永劫たえぬ悲痛の傷うけて、  
その重傷に世界を泣かしめて。

我はた惑ふ、地上の永滅は、

力を仰ぐ有情の涙にぞ、  
仰ぐちからに不斷の永生の  
流轉現する尊ときひらめきか。  
ああよしさらば、我が友マカロフよ、  
詩人の涙あつきに、君が名の  
叫びにこもる力に、願くは  
君が名、我が詩、不滅の信とも  
なぐさみて、我この世にたたかむ。

水無月くらき夜半の窓に凭り、  
燭にそむきて、静かに君が名を  
思へば、我や音なき狂瀾裡、  
したしく君が渦巻く死の波を  
制す最後の姿を観るが如、



頭は垂れて、熱涙せきあへず。  
 君はや逝きぬ。逝きても猶逝かぬ  
 その偉いなる心はとこしへに  
 偉靈を仰ぐ心に絶えざらむ。  
 ああ、夜の嵐、荒磯のくろ潮も、  
 敵も味方もその額地に伏せて  
 火焰の聲をあけてぞ我が呼ばふ  
 マカロフが名に暫しは鎮まれよ。  
 彼を沈めて千古の浪狂ふ  
 弦月遠きかなたの旅順口。

### アカシヤの蔭

たそがれ淡き揺曳やはらかに、  
 收まる光暫しの名残なる

透影投げし碧の淵の上、  
 我ただひとり一日を漂へる  
 小舟を寄せて、アカシヤ夏の香の  
 木蔭に權をとどめて休らひぬ。

流れて涯も知らざる大川の  
 暫しと淀む翠江、夢の淵！  
 見えざる靈の海原、花岸の  
 ふる郷とめて生命の大川に  
 ひねもす浮びただよう夢の我！  
 夢こそ暫し宿れるこの岸に  
 ああ夢ならぬ香りのアカシヤや。

野末に匂ふ薄月しづかなる



光を帯びて微風吹く毎に、  
 英房ゆらぎ、眞白の波湧けば、  
 みなぎる薫りあまきに蜜の蜂  
 群るる羽音は暮れゆく野の空に  
 猶去りがての呟やき、夕の曲。

纜結ともづなゆひて忘我の歩みもて、

我は上りぬ、アカシヤ咲く岸に。――

春の夜櫻おほろの月の窓

少女が歌にひかれて忍ぶ如。

ああ世の戀よ、まことに淀の上の  
 アカシヤ甘き匂ひに似たらすや。  
 いのちの川の夢なる青淵に

夢ならぬ香の雫をそそぎつつ、

幻過ぐるいのちの舟よせて、

流るる心に光の鎖なす

にはひのつきぬ思出結ぶなる。

淀める水よ、音なき波の上に

没薬もつやく撒くとしたたるアカシヤの

その香、はてなく流るる汝が旅に

消ゆる日ありと誰かは知りうるぞ。

ああ我が戀よ、心の奥ふかく、

汝が投げたる光に香りとの

(たとへ、わが舟巖に覆へり、

或は暗の嵐に迷ふとも、)

沈む日ありと誰かは云ひつるぞ。



はた此の岸に溢るる平和の  
見えざる光、不斷の風の樂、  
光と樂にさまふよ幻の

それよ、我が旅はてなむ古郷の  
黄金の岸のとはなる榮光と  
異なるものと誰かははかりえむ。  
ああ汝水よ、われらはふるさとの  
何處なりしを知らざる旅なれば、  
アカシヤの香に南の國おもひ  
戀の夢にし永遠なる世を知るも、  
そは罪なりと誰かはさばきえむ。

ああ今、月は靜かに萬有を

ひろごり包み、また我心をも  
光に融かしつくして、我すでに  
見えざる國の宮居にアカシヤと  
咲きぬるかともやはらく愛の岸、  
無垢なる花の匂ひの幻に  
神かの姿けだかき現かな。

水も淀みぬ。アカシヤ香も増しぬ。  
いざ我が長きいのちの大川に  
我も宿らむ、暫しの夢の岸。――  
暫しの夢のまたたき、それよ、けに、  
とはなる脈のひるまぬ進み搏つ  
まことの靈の住家の證なれ。



## ひとつ家

にこれる浮世の嵐に我怒りて、  
 孤家、荒磯のしじまにのがれ入りぬ。  
 捲き去り、捲きくる千古の浪は碎け、  
 くだけて悲しき自然の樂の海に、  
 身はこれ寂寥兒、心はただよひつつ  
 靜かに思ひぬ、——岸なき過ぎ來し方  
 あてなき生命の舟路に、何處へとか  
 わが魂孤舟の楫をば向けて行く、と。  
 夕浪懶く底なき胸のどよみ、  
 その色、音、皆不朽の調和もて、  
 捲きては碎くる入日のこの東の間——

沈む日我をば、我また沈む日をば  
 凝視めて叫ぶよ、無始なる暗、さらすば  
 無終の光よ、渾てを葬むれとぞ。

## 壁なる影

夜風にうるほひ、行春淡き  
 有田燭の火影ぞ揺れて、  
 ああ今、ほのかに、幻ふかく  
 起伏さだめぬ影こそ壁に。

142  
 詩歌の愁ひに我が身は瘦せて、  
 くだつ夜、低唱、無興の窓に。  
 こは何、落ちくる壁なる影よ、——  
 靜かに、靜かに、捲きてはひらく。



たとへば大海青波鳴りて  
 涯なき涯にとただよふそれか。  
 或は、無終の歴史の上に  
 湧き、また沈める流轉の跡か。  
 めぐれる影にと思は耽る。――  
 ああ今、我聞く、音なき波に  
 遠灘どよもす響ぞこもれ、  
 思の青渦、とく、またゆるく。  
 とく、またゆるかに影こそ拵れば、  
 うかべる光に心は漂ふ。――  
 この影、幻、ああ聞きがたき  
 天海「秘密」のそのおとづれか。

思は高めば、影また深く、  
 見えざる文こそ壁には照れる。――  
 幾夜の我が友、そよ、わがいのち、  
 秘密に泳げる我が影なりき。

燈火うするる。薄れよ。暗も  
 心の壁なる我が影消さじ。  
 ああ我汝に謝す、我が夜は明けば、  
 この影、まことの光に生きむ。

鷗

藻の香に染みし白晝の砂枕、  
 ましろき鷗ゆたかに、波の穂を  
 光の羽にわけつつ、碎け去る



汀の漚あわにえものをあさりては、  
わが足近く翼を休らへぬ。

諸手をのべて、高らかに吟すれど、  
鳥驚かず、とび去らず、  
ぬれたる砂にあゆみて、退き、また  
寄せくる波をむかへて、よろこびぬ。

つぶらにあきて、青海の

匂ひかがやく小腫は、

眞珠の光あつめし聖の壺。

はてなき海を家とし、歌しとて、

おのが翼を力と遊べばか、

汝が行くところ、腫の射る所、

狐疑うたがひ、怖れ、さけすみ、あなどりの

さもしき陰影は隠れて、空蒼し。

ああ逍遙よ——おきての網の中

立ちつつまれてあたりをかへり見る

むなしき鎖解きたる逍遙よ、

それただ我ら自然の寵兒らが

高行く天の世に似る路なれや。

來ても聞けかし、今この鳥の歌。——

さまよひなれば、自由まなる戀の夢、

あけぼの開く白藻の香に宿り、

起伏つきぬ五百重の浪の音に

光と暗はい湧きて、とこしへの

勇みの歌は、ひるまぬ生の樂。



ああ我が友よ、願ふは、暫しだに、  
 つかるる日なき光の白羽をぞ  
 翼なき子の胸にもゆるさずや。  
 汝があるところ、平和、よろこびの  
 軟風かよひ、黄金の日は照れど、  
 人の世の國けがれの風長く、  
 自由の花は百年地に委して  
 不朽と詩との自然はほろびたり。

。 寂 寥

片破月の淋しき黄の光—  
 破窓洩れて、老尼の袈裟の如、  
 静かに細うふるひて、讀みさしの

書の上、さてて黙座の膝に落ちぬ。  
 草舎の軒をめぐるは千萬の  
 なけきの絲のたてぬき織り交せて  
 しらべぞ繁き叢間の蟲の歌。  
 夜の鐘遠く、灯も消えがてに、  
 ああ美しき名よ、寂寥！  
 天地眠り沈みて、今こそは  
 汝がいと深き吐息と脈搏の、  
 ひとりしさめて物思ふわが胸と  
 すべての根さず地心にひびく時。

壁には淡き我が影。堆たかく  
 亂れて膝をかこめる黄卷は  
 さながら遠き谷間の虚洞より



脱け出で來ぬる「祕密」の精の如——  
かかる夜幾夜、見えざる界より  
美しき名よ、寂寥！

汝この窓を音なく、月影の  
鈍色被衣纏ひてすべり入り、  
なつかし妻の如くも親しげに  
ほほゑみ見せて側へに坐りけむ。

見よ、汝が吐息靜かに吹く所、  
人の心の曇りは拭はれて、  
あたりの「物」の動きに、動かざる  
まことの「我」の姿の明らかに  
宿るを眺め、汝が脈搏つ所、  
すべての音は潜みて、ただ洪き

心の海に漂ふ大波の  
寄せては寄する響のきこゆなる。  
美しき名よ、寂寥！  
ああ汝こそは、鋭き斧をもて  
この人生の假面を剝ぎ去ると  
命負ひ來つる有情の使者か。

汝がおとづれば必ず和らかに、  
またいと早く、恰も風の如。  
二人のあるや、汝が眼に一すぢに  
貫ぬくとても、胸にとそそぎ來て、  
その微笑もまことに莊嚴に、  
たとへば百の白刃の劔もて  
守れる暗の沈黙の森の如、



聲なき言葉四壁にみちくして、  
おのづと下る頭はまた起きず。  
美しき名よ、寂寥！

かくて再び我をば去らむとき、  
涙は溜れて、袂はうるほへど、  
あらたに胸にもえ立つ生命の  
石炭こそ汝が遺せる記念なれ。

美しき名よ、寂寥！

嘗ては我も多くの世の人が  
厭へる如く、汝をばいとへりき。  
そはただ春の陽炎もゆる野に  
とび行く蝶の浮きたる心には、  
汝が手のあまり霜には似たればぞ。  
さはのれ、汝やまことに涯もなき

大海にして、不斷の動搖に、  
眞面目と、常に高きに進み行く  
心の奥の鍵をぞ秘めたれば、  
遂には深き崇高き生命の  
勇士の胸の門をばひらくなり。

美しき名よ、寂寥！

たとへば汝は祕密の古鏡、  
人若し姿投ぜば、いろくくの  
假装はすべて、濡れたる草の葉の  
日に乾く如、忽ち消えうせて、  
おもてに浮ぶまろらの影二つ、――  
それ、かざりなき赤裸の「我」と、また  
「我」をしめぐる自然の偉いなる



不朽の力、生火の燃ゆる門。  
 けに寂寥にむかひて語る時、  
 人皆すべて眞の「我」が言葉、  
 「我」が聲をもて眞を語るなる。

美しき名よ、寂寥！

汝また長き端なき鎖にて、  
 とこしへ我を繋ぎて奴隷とす。  
 家をば出でて自然に對する時、  
 うづ巻く潮の底より、天そそる  
 秀峰高き際より、さてはまた、  
 黄に咲く野邊の小花の葉蔭より  
 雀躍り出でて、胸をば十重二十重  
 轟と捲きつつ尊とき天の名の

示現の前、頭を下げしむる、  
 それその力、あまた汝にあり。

美しき名よ、寂寥！

戀する者の胸より若しも汝が  
 おとづれ絶たば言葉も聞きえぬ  
 心の奥の叫びを語るべき  
 慰安の友の滅びて、彼遂に  
 たへぬ悩みに物にか狂ふべし。  
 またかの善と眞を慕ふ子に、  
 若し汝行きて、みづから自らに  
 教ふる時を與ふる勿りせば、  
 遂には彼の心も枯るるらむ。



美しき名よ、寂寥！

寂寥人を殺すと誰か云ふ。

靈なきむくろ、花なき醜草は

汝がおごそかの吐息に けに或は

死にもやすべし。朽木に花咲かず。

ああ寂寥よ、汝が脈搏つところ、――

我と我との交はる所にて、

うちめぐらせる靈氣の八重垣に

詩歌の花の戀しきみ園あり。

そこに我が魂しづかにさまよふや。

おのづと起る唸き、聲は皆、

歴史と堂と制規さだめを脱け出でて、

親しく人と自然を司どる

慈光の神に捧ぐる深祈禱。

あふるる涙、それまた世の常の

涙にあらず、まことの生命の

源ふかく歸依する瑞の露。

美しき名よ、寂寥！

汝こそけにも心の在家ありかにて、

見えぬ奇かる界に門ひらき、

またこの生けるままなる世の態に

却りて大き靈怪くしびの隠れ花

かしこに、ここに、各自の胸にさへ

咲けるを示し、無言の教垂れ

想ひをひきて自在の路告ぐる

豊麗無垢の尊とき靈の友。

ああこの世界ひとりの『人』ありて、



若し我が如く、美し寂寥の  
腕に抱かれ、處と時を超え、  
あこがれ泣くを樂しと知るあらば  
我この月の光に融け行きて、  
彼には問はむ「榮華と黄金の  
まばゆき土の價や幾何」と。

### 秋風高歌

#### 黄金向日葵

我が戀は黄金向日葵、  
曙いだす鐘にさめ、  
夕の風に眠るまで、  
日を趁<sup>か</sup>ひ光あくがれ、まろらかに  
眩<sup>くら</sup>ゆくめぐる豊熱の  
彩<sup>いろ</sup>どり饒<sup>にぎ</sup>きこがねの花なれや。  
これ夢ならば、とこしへの  
さめたる夢よ、こがねひぐるま。  
これ影ならば、あたたかき  
瑞雲まよふ照日の生ける影。



圓らかなれば、天蓋の  
遮りもなき光の宮の如。  
まばゆければぞ、王者にすなる如  
百花、見よや芝生にぬかづくよ。

今はた、似たり、かなたの日輪も、  
わが戀の日にあこがれて  
ひねもすめぐるみ空の向日葵に。

我が世界

世界の眠り、我れただひとり覺め、  
立つや、草這ふ夜暗の丘の上。  
息をひそめて横たふ大地は  
わが命に行く車にて、

星鏤めし夜天の浩蕩は  
わが被きたる笠の如。

ああこの世界、或は朝風ッ  
光とともに、再びもとの如、  
我が司配はなる時あらむ。  
されども人よ知れかし、我が胸の  
思の世界、これその世界なる  
すべてを越えし不動の國なれば、  
我悲します、また失はず、  
よし、この世界、再びもとの如、  
蠢く人の世界となるとても。

黄の小花



夕暮野路を辿りて、黄に咲ける  
小花を摘めば、涙はせきあへず。

ああ、ああこの身、この花小さくも  
いのちあり、また仰ぐに光あり。  
この野に咲ける、この世に捨てられし、  
運命よ、いづれ、大慈悲の  
かくれて見えぬ恵みの業ならぬ。

よし我、黄なる花の如、  
霜にたふる時あるも、  
再び、もらす事なき天の手に  
還るをうべき幸もてり。

ああこの花の心を解くあらば  
我が心また解きうべし。  
心の花しひらきなば、  
またひらくべし、見へざる園の門。

君 が 花

君くれなるの花薔薇、  
白絹かけてつつめども、  
色はほのかに透きにけり。  
いかにやせむとまどひつつ、  
墨染衣袖かへし  
掩へどもくいや高く  
花の香りは溢れけり。



ああ秘めがたき色なれば  
 頬にいのちの血ぞ熱り、  
 つつみかねたる香りゆゑ  
 暈に星の香も浮きて、  
 伴はりがたき戀心、  
 熄えぬ火蓋の火の息に  
 君が花をば染めにけれ。

波は消えつつ

波は消えつつ、碎けつつ  
 底なき海の底より湧き出でて、  
 朝より眞晝、晝より夜に朝に  
 不斷の叫びあけつつ、帯の如、  
 この島根をば纏ふなり。

ああ詩人の興來の

波も、消えつつ、碎けつつ。  
 はかり知られぬ「秘密」の胸戸より、  
 劫風<sup>てうふう</sup>ともに千古の調にして、  
 不滅の教宣りつつ、勇ましく  
 人の心の岸には寄するかな。

柳

ああ君こそは、青淵の  
 流轉の波に影浮けて  
 しなやかに立つ柳なれ。

流轉よ、さなり流轉よ、それ遂に  
 夢ならず、また影ならず、



照る世の生日進み行く  
 生命の流れなれば、春の風  
 燻じて波も香にをどり、  
 ひと雨毎に梳づる  
 愛の小櫛の色にして、  
 見よ今、枝の新装、  
 青淵波もたのしげに  
 世は皆戀の深緑。

愛の路

高きに登り、眺むれば、  
 乾坤愛の路通ふ  
 青海原のはてにして、  
 安らかに行く白帆影。――

波は休まず、携ますに  
 相噛み、くだけ、動けども、  
 安らかに行く白帆影。

路のせまきに、せはしげに  
 蠢めく人よ、来て見よや、――  
 花を虐げ、景を埋め、  
 直なるみちをつくるとて、  
 狭き小暗き愁嘆の  
 牢獄に落ちし子よ、見よや、――  
 大海みちはなくして、縦横の  
 みちこそ開け、愛の路。

落ちし木の實



秋の日はやく母屋の屋根に入り、  
 ものさびれたる夕をただひとり  
 紙障しじょうをあけて庭面にむかふ時、  
 庭は風なく、落葉の音もたえて、  
 いと静けきに林檎の紅の實は  
 かすかに落ちぬ波なき水潦。  
 夕のあはき光は箒目の  
 ただしき土に限なくさまよひて、  
 猶暮れのこる空の心のみ  
 一きは明くうつせる水潦、  
 今色紅の木の實の落ち來しに  
 にはかに波の小渦立てたれど、  
 やがてはもとの安息うかべつつ、  
 再び空の心を宿しては、

その遠蒼き光に一粒の  
 りんごのあたり縁かちどりぬ。

ああこの小さき木の實よ、八百千歳、  
 かくこそ汝や静かに落ちにけむ。  
 またもも年の昔に、西人が  
 想ひに耽る庭にとおとなひて、  
 尊とき神の力の一鎖、  
 かくこそ落ちて、彼には語りけめ。

我今人のこの世のはかなさに  
 つらさに泣きて、運命の遠き路、  
 いづこへ、若きかよわきこのむくろ  
 運ばむものと祕かに惑へりき。



落ちぬる汝を眺めて、我はまた、  
辛からず、はたはかなき影ならぬ  
たふとき神の力の世をば知る。

汝何故にかくまで静けきぞ、——  
人は、みづから運命に足りかねて、  
さびしき廣み、はてなき暗の野の  
曠き、にがき悲哀の實を喰むに、  
何故汝のかくまで安けきぞ、——  
足るある如く、落ちては動かすに  
心に何か深くも信賴たよる如。

夜の歩みは漸く迫り來て、  
羽弱か、群に後れし夕鴉

寂ある聲に友呼ぶ高啼きや、  
水面にうきしみ空の明るみも  
消えては、せまきわが庭駒みぬ。  
ああこの暗の吐息のただ中よ。  
灯ともす事も、我をも忘れては、  
よみがへりくる心の光もて  
か黒き土のさまなる木の實をば  
打眺めつつ、靜かに跪づく。

秘

密

花蠟はなろうもゆる御簾の蔭、  
琴柱をおいて少女子の  
小指やはらにしなやかに、  
絃より絃に轉すれば、



さばしり出づる幻の  
 人酔はしめの樂の宮、  
 ああこの宮を秘め置きて  
 とこあらたなる琴の胸、  
 祕密ならずと誰か云ふ。

八千年人の手に染まぬ

神の世界の大胸に

深くするどくおごそかに

我が目うつれば、ちよろづの

詩は珠なし、清水なし、

光の川と溢れくる。

ああこの水の美しく

休むことなく湧き出るを

祕密なりとは誰か知る。

あ　　ゆ　　み

始めなく、また終りなき

時を刻むと、柱なる

時計の針はひびき行け。

せまく、短かく過ぎやすき

いのち刻むと、わが足は

ひねもす路を歩むかも。

『秋風高歌』畢



## 江上の曲

水緩やかに、白雲の  
影をうかべて、野を劃る  
川を隔てて、西東、  
西の館にほひ髪  
あでなる姫の歌絶えず  
東の岸の草蔭に  
牧の子ひとり住ひけり。

姫が姿は、弱肩に  
波うつ髪縁なる  
雲を被きて、白龍の  
天の階あかふむ天津女が

羽衣ぬけるたたずまひ。  
牧の子が笛、それ、野邊の  
白き羊がうら若き  
腫をあけて大天の  
圓らの夢にあこがるる  
おもひ無垢なる調なりき。

されども川の西東、  
水の碧の胸にして、  
月は東に、日は西に  
立ちならびたる姿をば  
静かに宿す時あれど、  
二人が暈、ひと目だに  
相逢ふことはなかりけり。



ふたりが腫ひと日だに  
 あひぬる事はあらざれど、  
 小窓、櫻の花心地  
 春日燻する西の岸、  
 とある日、姫が紫の  
 とぼりかかけて立たす時、  
 緑草野の丘遠く  
 いとも和らに、たのしげに  
 春の心のただよひて、  
 糸遊なびく野を西へ、  
 水面をこえて浮びくる  
 牧の子が笛聞きしより、  
 何かも胸に影遠き

176

むかしの夢の仄かにも  
 おとづれ來らむ思ひにて、  
 晝はひねもす、日を又日、  
 姫があでなる佛は、  
 廣野みどりのあめつちを  
 粹のやうなる浮彫と、  
 やかたの窓に立たしけり。

また、夕されの露の路、  
 羊を追うて牧の子が  
 草の香深き岸の舎に  
 かへり來ぬれば、かすかにも  
 薄明りさす川面に  
 さまよひわたる歌聲の



美し夢に魂ひかれ、  
 ただ何となくその歌の  
 主を戀しみ、獨木舟、  
 朽木の杭に縋を  
 解きて、夜なく、牧の子は  
 西の岸にと漕ぎ行きぬ。

ああ、ああ、されど日を又夜、  
 ふたりが腫、ひとたびも

相あふ時はあらざりき。

姫が思ひはただ遠き

晝の野わたるたえぐの

笛のしらべの心にて、

牧の子が戀、それやはた、

帳のらめく窓洩れて

灯影とともにゆらぎくる

清しき歌の心のみ。

姫は夢見ぬ、「かの野邊の

しらべぞ、夜半のわが歌の

天よりかへる反響なれ。」

また夢見けり、牧の子も、

「かの夜なくの歌こそは、

白晝わが吹く小角の音の

地心に沁みし遺韻よ。」と。

牧の子は野に、いと細き

希望の節の笛を吹き、

姫はさびしく、紫の



とばりを深み、夜半の窓、  
 人なつかしのあこがれの  
 柔き歌聲うるませて、  
 かくて日毎に姫が目は  
 牧野にわしり、夜な／＼に  
 牧の子が漕ぐうつろ舟  
 西なる岸につながれて、  
 櫻花散る行春や、  
 行きて、いのちの狂ひ火の  
 狂ふ焰の深緑、  
 ただ燃えさかる夏の風  
 野こえてここにみまひけり。

ああ夏なれば、日ざかりの

光にきはふ野の羊、  
 草踏み亂し、埒を超え、  
 泉の縁のたはぶれに  
 鞭をおそれぬこをどりや、  
 西の岸にも、葉櫻に、  
 南蠻鳥は眞夏鳥、  
 來て啼く歌は、かがやかの  
 生ける幻誘ふ如、  
 ふる里とほき南の  
 燃えにぞ燃ゆる戀の曲、  
 照る羽つくろひ、腫をあけて、  
 のみど高らに傳ふれど、  
 さびしや、二人、日を又夜、  
 相見る時はあらざり。



胸に渦巻くいのちの火  
 その焔にぞ燬やかれつつ、  
 ああ燬かれつつ、かくて猶、  
 捉へがたなき夢追うて、  
 水ゆるやかの大川の  
 (隔てよ、さあれ浮橋の  
 西と東に、はかなくも  
 影に似る戀つながれぬ。

夏また行きぬ。かくて猶、  
 ああ夢遠きあこがれや、  
 はかなき戀はつながれぬ。  
 牧野の草に、『秋』はまづ  
 野菊と咲きて、小桔梗に、

水引草にいろくの  
 露染衣、蟲の音も、  
 高吹く風も追々に、  
 ひと葉ひと葉と水に散る  
 岸の櫻の紅葉さへ、  
 夢追ふ胸になつかしく  
 また堪へがたき淋しさを  
 この天地にさそひ來ぬ。

ひと夜、月いと明くして、  
 咽ぶに似たる漣の  
 岸の調も何となく、  
 底ひ知られぬ水底の  
 秘めたる戀の音にいづる



おとなひの如聞かれつつ、  
 まろらの月のおもて、また  
 わが心をばうつすとも  
 見えて、ああその戀心  
 いと堪へがたき宵なりき。  
 牧の子が舟ゆるやかに  
 東の岸をこぎ出でぬ。

高窓洩れて、夢深き  
 月にただよふ姫が歌、  
 今宵ことさら澄み入りて、  
 ああ大川も今しばし  
 流れをとどめ、天地の  
 よろづの魂もその聲の

波にし融けて浮き沈み、  
 ただ天心の月のみが  
 光をまして、その歌の  
 切なる訴へ聴くが如、  
 この世の外の白鳥の  
 かがなき高き律べもて、  
 水面しづかにいわたれば、  
 しのびかねてや、牧の子は  
 權なけすて、中流の  
 水にまかする獨木舟、  
 舟をも身をも忘れ果て、  
 息もたえよと一管の  
 笛に心を吹きこみぬ。